JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

September 30, 2026, No.27

目次

巻頭言

JACET 関東支部長　鈴木彩子 ..... -1-

第 18 回関東支部大会報告

支部大会運営委員長　山口高領 ..... -2-

第 1 回支部総会報告

支部事務局幹事　佐竹由帆 ..... -9-

関東支部運営についてのアンケート結果報告

JACET 関東支部長　鈴木彩子 ..... -11-

JACET 関東支部講演会（第 1 回）報告

支部講演会委員長　青木理香 ..... -12-

各委員会からの報告

・支部講演会委員会

支部講演会委員長　青木理香 ..... -13-

・支部紀要編集委員会

支部紀要編集委員長　鈴木健太郎 ... -13-

事務局だより

支部事務局幹事　佐竹由帆 ..... -13-

JACET 関東支部ニューズレター第 27 号（WEB 版）刊行に寄せて

支部長　鈴木彩子（玉川大学）

皆さま、こんにちは。日頃より関東支部の諸活動にご支援、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。2025 年 6 月に関東支部長に就任してから、1 年余りが経ちました。ここで、この 1 年の活動を振り返るとともに、今後の予定について支部会員の皆さまと共有したいと思います。

就任当初は、支部研究企画委員の先生方のお力を借りながら、これまで関東支部が積み重ねてきた活動をしっかりと引き継いでいきたいと考えておりました。多くの先生方に支えていただきながら、講演会の開催や『JACET-KANTO Journal Vol. 13』の発行など、さまざまな活動を実施することができました。改めまして、支部活動にご協力くださっている皆さまに心より御礼申し上げます。

今年度の活動として特筆すべきことは、7 月 11 日（土）に早稲田大学にて関東支部大会を開催したことです。昨年度は第 64 回 JACET 国際大会が早稲田大学で開催されたため実施を見送りましたので、2 年ぶりの開催となりました。当日は「変革期における英語教育の再構築：批判的理論と実践のダイアローグ（Reconstructing ELT in a Time of Change: Dialogues between Critical Theory and Practice）」をテーマに、研究発表、実践報告、ワークショップ、賛助会員発表などが行われ、英語教育の研究と実践について幅広く考える機会となりました。

特別ワークショップには、お茶の水女子大学のロバート・J・ロウ先生をお招きし、「対話で拓く英語教育の研究と実践―批判的探究がもたらす教師の成長―（Expanding Horizons in ELT Research

and Practice through Dialogue: Teacher Growth through Critical Inquiry)」と題してお話しいただきました。ワークショップでは、参加者の皆さまからも活発に意見が出され、今回の大会テーマにも掲げられた「対話」を通して研究や教育実践について考えを深める様子が印象的でした。

支部大会は研究成果を発表し、互いに学び合う場であると同時に、普段なかなかお会いする機会のない先生方が集まり、新たなつながりをつくることのできる場でもあります。私自身も久しぶりにお会いできた先生方がおり、うれしく思いました。このような対面開催ならではの交流も随所に見られ、支部活動におけるこうした機会の大切さを改めて感じました。大会の企画・準備・運営に携わってくださった先生方、そしてご参加くださった皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、8 月 26 日から 28 日には、第 65 回 JACET 国際大会が立命館大学大阪いばらきキャンパスにて開催されました。私も参加いたしましたが、そこでも多くの関東支部会員の先生方が研究発表や大会運営など、さまざまな形で大会に関わっておられる姿を拝見しました。こうした会員の皆さま一人ひとりの活動の積み重ねが、関東支部の活性化にもつながっていることを改めて感じました。

2027 年度の第 66 回 JACET 国際大会は、再び東京で開催される予定です。関東支部としても、開催に向けてさまざまな形で協力していくことになります。多くの先生方のお力をお借りすることになると思いますが、関東地区で開催される国際大会が、会員の皆さまにとって有意義な研究・交流の場となるよう取り組んでまいります。なお、来年度の関東支部大会の開催については現在検討中です。決まり次第お知らせいたしますので、今しばらくお待ちください。

最後に、昨年度の巻頭言で、支部研究企画委員の先生方の力をお借りしながら、「なんか楽しいな」と感じていただける活動を目指したいと書きました。その思いは、2 年目を迎えた現在も変わっていません。研究成果を発表する、研究や教育について新しいことを知る、ほかの先生方と話をする、あるいは久しぶりに顔を合わせる―関わり方はそれぞれだと思いますが、関東支部の活動に参加してよかったと思っていただけるような場をつくっていければと考えています。

今後とも、JACET 関東支部の活動へのますますのご支援、ご協力をお願いいたします。

第 18 回関東支部大会報告

支部大会運営委員長
山口高領（秀明大学）

今回は、2026 年 7 月 11 日（土）に早稲田大学にて、2024 年度の関東支部大会以来 2 年ぶりの対面開催となりました。昨年度に関東支部の会員のみなさまから頂いたアンケートの結果を踏まえてのことです。

今年も、発表内容は過去最大級の規模でした。公募ワークショップ（2 件）・研究発表（6 件）・実践報告（5 件）・賛助会員発表（4 社）・展示（15 社）でした。

今回も、支部大会テーマに沿った招待ワークショップを開催できました。テーマは、“Reconstructing ELT in a Time of Change: Dialogues between Critical Theory and Practice”（変革期における英語教育の再構築：批判的理論と実践のダイアローグ）でした。招待ワークショップは、お茶の水女子大学の Robert J. Lowe 先生による“Expanding Horizons in ELT Research and Practice through Dialogue: Teacher Growth through Critical Inquiry”が行われました。

関東支部以外の会員の発表・参加もあり、非会員の方も参加しました。発表の間の時間に余裕（前回のアンケートでの指摘）を持たせ、好評の

後日録画視聴サービスを継続し、お弁当の手配、立て看板の設置など新しい試みも行いました。

来年度は、国際大会が関東支部地区の大学で行われる予定です。2027 年度に支部大会を開催するかは、関東支部会員のみなさまからのご意見を参考にしつつ、支部運営委員会で決めてまいります。

以下、発表後記と、大会参加者によるアンケート結果等をお知らせします。

■発表後記■

以下に、招待ワークショップ・公募ワークショップ・実践報告・研究発表について、主に司会をしてくださった先生からのご報告を掲載します。

招待ワークショップ　13:00-14:30 “Expanding Horizons in ELT Research and Practice through Dialogue: Teacher Growth through Critical Inquiry” Robert J. Lowe 司会：鈴木 彩子（玉川大学）

本ワークショップでは、ELT 分野で Duoethnography の発展に大きく貢献してきた Robert J. Lowe 先生が、Duoethnography の概要や基本理念、ELT 研究に導入された経緯などについて解説した。その後、提示された問いについて近くの参加者と対話を行い、その内容を全体で共有しながら理解を深める演習が実施された。会場からも活発な質問や意見が寄せられ、最後には短時間ながら Duoethnography を実践する機会も設けられ、参加者がその特徴を体験的に学べる充実したワークショップであった。特に印象的だったのは、Duoethnography は価値観や考え方が近い研究者同士ではなく、異なる立場や経験を持つ者同士が対話を重ねることで新たな理解を生み出すという考え方である。共同研究のあり方を改めて考えさせられるとともに、異なる立場の研究者との対話が新たな知見を生み出す可能性について理解を深める機会となった。（文責 鈴木）

研究発表 1　9:40-10:10 「複言語教育の実践 : SNS の多言語ハッシュタグが学習者の言語ポートレートに与える影響」吉枝 恵（防衛大学校） 司会 : 中山 夏恵（文教大学）

「メディア英語」の授業で実施された、多言語ハッシュタグを用いた英語によるインスタグラム投稿プロジェクトが、学習者の言語ポートレートに与える影響について発表された。参加者は、プロジェクトの前後で計 3 回、多言語に対する意識を可視化する言語ポートレートを作成した。インスタグラムへの投稿や言語ポートレートの内容を混合分析の結果、プロジェクトを通して学生が自分と関わりがあると意識する言語の種類・数が増加する様子が確認された。また、複数の言語に触れながら発信する経験を通して、自文化との関連付けや複言語的な行動の広がりが観察された。（文責 中山）

公募ワークショップ 1　10:10 – 11:10 「AI 時代のエッセー評価 : アセスメント・ルーブリックを使って対応を共に考える」松岡 弥生子（University of the People）

参加者は、学生または AI によって書かれた 3 本の英語エッセーの序文部分を、評価ルーブリックを使用して採点する活動を体験した。その結果、文章構成、言語使用、問題提起、情報の扱い、リサーチクエスチョン等すべての項目で AI 作文が高得点となる事実を確認した。グループ討論では、人間の文章には既存の項目で評価しきれない秀逸点があり、AI 時代のエッセー評価基準には、独創性や個別性を反映した評価項目の追加が必要とする意見が多く挙げられた。（文責 松岡）

研究発表 2　10:20 - 10:50 「大学新入生の英語観の分析 —ELF の視点から—」鈴木 彩子（玉川大学） 司会 : 荒川 オクサナ（流通経済大学）

本研究では、2025～2026 年度の大学英語専攻新入生の英語観を GEO-Q（Funada et al., 2020）で分析した。その結果、学生は「多様な英語」「多言語環境」「異文化交流」を肯定的に捉える一方、多様

な英語の授業への導入や「英語は自分の言語である」という意識には回答のばらつきが見られた。以上より、国際共通語として英語を使う力の育成には、多様な英語への理解と、自分の英語もその一つと捉える意識を育むことが重要であると示唆された。（文責 荒川）

研究発表 3　11:00 - 11:30「J-POSTL 自己評価記述文の構造的特性の探索―教員養成における授業設計への示唆―」中山 夏恵（文教大学）　司会：長田 恵理（國學院大學）

J-POSTL の教職履修生用を中心に 64 の SADs を選定し、その回答をもとにラッシュ分析を行い、記述文の難易度と分野間の関係を検討する研究である。学習指導要領等の概念的理解を要する「教育環境」や「授業実践」に関わる領域は難易度が高いであろうとの仮説に反し、結果は「教育環境」の記述文の多くが相対的に容易であることを示した一方、「教授資料の入手先」などが困難だと捉えられていた。校種は違えど教員養成課程で教鞭をとる身として、自分自身の授業設計にも参考にしたい結果であった。（文責 長田）

公募ワークショップ 2　14:40 - 15:40 「リーダーズ・シアター体験：協同でつなげる読解・音読・表現・相互評価」 浅野 享三（元、南山大学）

本ワークショップでは、読解教材として扱う作品を登場人物ごとのセリフやナレーションに分けた後、それぞれに読み手を割り当て、作品の情景や登場人物の感情を思い浮かべながら音読する IRT 形式のリーダーズ・シアターという手法が紹介された。参加者は 5 人 1 グループに分かれて、講師の指導のもと台本を深く読み解きながら音読の工夫の仕方を学んだが、他のグループの発表も見ることで新たな音読の手法も発見することができた。深い読解力を養うだけでなく、音声表現力の向上、さらに相互の学びを実現することのできる実践であった。（文責 伊藤）

研究発表 4　14:40 - 15:10 “Evaluating Student Satisfaction in an EAP Program” Robert C. Morel (Rikkyo University) 司会：辻 るりこ（和洋女子大学）

This presentation explored student satisfaction in an English for Academic Purposes (EAP) program through the Realist Evaluation framework. Using the Context–Mechanism–Outcome (CMO) model, the study examined what works, for whom, and in what circumstances. It compared practitioners' and students' perspectives, showing that student voices add nuance and depth to practitioners' insights rather than contradicting them. The presentation also suggested that comparing these perspectives can help shift the focus of program design toward students' actual classroom experiences. I found this presentation inspiring because it offered me a fresh perspective on how educational programs can be evaluated. （文責 辻）

実践報告 1　15:20 - 15:50 “Report on Expanding English-Medium Instruction and Establishing a Full English-Taught Degree Pathway” Tetsuya Fukuda (Juntendo University) 司会：神村 幸蔵（筑波技術大学）

This study describes the rapid expansion of English-medium instruction (EMI) and the establishment of the English Track, a fully English-taught degree pathway, at the Faculty of International Liberal Arts (FILA), Juntendo University. Building on the author’s extensive EMI experience and formal training, the faculty expanded its EMI curriculum from about 20 courses in 2024 to more than 70 in 2026. Initially focused on introductory subjects, EMI was later extended to Japanese studies and the natural sciences. A key factor in this growth was the strategic use of full-time English language instructors with diverse academic backgrounds to teach content courses. The increased number of EMI courses enabled the launch of the English Track, allowing students to complete an

undergraduate degree entirely in English. Seventeen students ultimately enrolled after a selective admission process. Remaining challenges include determining the future scale of the program, promoting integration between English Track and other students, and expanding elective course offerings to meet evolving student needs. After the presentation, several questions were raised from the floor, leading to a meaningful discussion of the benefits and challenges of EMI. （文責 神村）

研究発表 5　15:20 - 15:50『自律的シャドーイング継続における「楽観的バイアス」: 学習者の自己効力感と目標設定の推移』中西のりこ・村岡有香・阿川敏江　司会：瀧澤 英子

大学生の英語学習として、長期休暇中のシャドーイング自律学習における継続メカニズムを、自己効力感（SE）と目標設定（GS）の観点から分析した。結果、学習継続にはSEの「3.0の閾値」維持や回復力が決定的な要因であること、また完走群では自己能力を高く見積もる楽観的バイアスが、高負荷タスクを完遂する保護機能として働いたことを明らかにした。指導実践にもとづく具体的なエピソードも交えた発表となり、類似テーマに取り組む研究者からも質問が発される有益な場となった。（文責 瀧澤）

実践報告 2　15:50 - 16:20「英語学習者と日本語学習者が集う教室―協働と言語資源に焦点をあてて―」山本 綾（東洋大学）　司会：馬場 千秋（帝京科学大学）

米国大学日本校の外国人留学生(FS)の授業に，日本人大学生(JS)が訪問し，グループワークを行った実践報告であった。活動の様子は録音・録画，文字化され，FS と JS が相互理解に至る過程に着目し，相互行為の社会言語学枠組みで質的に分析された。その結果，(1)英語使用が推奨された活動内での日本語使用, (2)目標達成や意味交渉用に JS のスマートフォンを共有ツールとして使用，(3)相互理解が円滑に進まない場合，JS 同士，FS 同士が協働で相手の母語を用いて再定式化，(4)教室外交流への発展，という状況が見られた。今後の実践に向けて，事前の授業設計と学生への事前指導の有効性について示唆された。（文責 馬場）

実践報告 3　16:00 - 16:30「自動翻訳・ＡＩ時代の翻訳課題」大味 潤（東京経済大学）　司会：大野 真機（昭和医科大学）

本発表は、自動翻訳・生成 AI の時代にふさわしい英文和訳課題として、発表者が長年実践してきた「翻訳問題」を紹介するものであった。文脈に即した自然な日本語表現を重視し、教材を更新しながら課題を設計しているという。実際の学生の答案を示し、満点となる訳文と減点対象となる箇所を具体的に解説されたため、記述式課題の評価基準が明快に伝わった。質疑では、不正防止や解答表現の多様性、採点の一貫性が論点となり、優れた翻訳であっても表現は必ずしも似通わないという発表者の指摘が、とりわけ印象に残った。AI 時代の課題設計と評価を考える上で、示唆に富む発表であった。（文責 大野）

研究発表 6　16:00 - 16:30 “I Didn’t Come Here to Speak Japanese”: Ideologies of English as a Medium of Instruction in Japanese Higher Education” Masaaki Kondou (Waseda University)　司会：西川 恵

The presentation examined English-Medium Instruction (EMI) in Japanese higher education from the perspective of language ideology. EMI has expanded rapidly as part of Japan’s internationalization policies. However, it reflects institutional goals, expectations, and underlying beliefs about language rather than being a neutral educational practice. Also, EMI in East Asia is often understood primarily as an opportunity to improve English proficiency, which can reinforce the idea that the ideal form of English is

native-speaker English. As a result, many Japanese students tend to undervalue their own English because it differs from native-speaker norms.

Three interrelated language ideologies were identified through an analysis of five students' narratives in this study: native-speakerism, standard English ideology, and a monolingual mindset. Based on these findings, the presenter argued that EMI stakeholders should recognize the value of diverse Englishes, English as a lingua franca, and translanguaging. Furthermore, Japanese should be viewed as a valuable linguistic resource that supports learning and the development of students' multilingual identities. Finally, future EMI research should also examine learners' attitudes toward Japanese and other languages while drawing more actively on insights from English language teaching research on language ideology. （文責 西川）

実践報告 4　16:30-17:00「データ駆動型学習 (DDL) の教材開発：生成 AI・コーパス連携による授業実践」佐竹 由帆（青山学院大学）　司会：大井 洋子（清泉女子大学）

コーパスを活用したデータ駆動型学習（Data-Driven Learning: DDL）教材の開発をテーマに、さまざまなコーパスの特徴や活用方法に関する基礎知識をわかりやすく解説するとともに、それらを授業や学生の学習にどのように効果的に取り入れることができるかを論じた研究発表であった。発表では、DDL を効果的に実践するためには、学習者に適度な認知的負荷を適切なタイミングで与えることに加え、教師による問いかけが学習者の気づきを促す上で重要であることが示された。また、学習者の気づきを分類・分析することにより、語彙や文法、語句の用法に関する正確で深い理解が促され、学習者の自律的な学習を支援する可能性が示された。（文責 大井）

■大会参加者によるアンケート結果等■

まず、数字で見る今回の参加者状況を報告します。事前大会申込者件数（91 件）・後日視聴サービス申込者件数（75 件）・大会参加者アンケート（20 件）でした。今回も実施した後日視聴サービスについては、他支部会員を含め、例年以上に需要があることがわかりました。サービス希望者の内訳は、（関東支部 49% ; 他支部 43%）でした。

次に、今回の支部大会に参加してくださった方を対象に行った無記名アンケート結果を、良かった点、改善点、今後扱ってほしいテーマの 3 点についてお知らせします。大会運営委員からの意見も入っています。今回も貴重なご意見を頂けました。来年度の支部大会運営に活かしてまいります。

［今回の支部大会のよかった点］

・何より開催されたという事実

・1. 本大会についてのご案内等について前日までこまめにメール等で情報共有をしていただきありがとうございました。2. 発表会場が大変広く活動しやすかったです。

・1. 場所が便利ですばらしいです。2. 賛助会員の皆さんとお話する機会があり良かったです。3. 全体的にスムーズに運営されており、どうもありがとうございました。

・都心からアクセスのしやすい、快適な会場で開催された点

・対面参加に加え、オンライン（ハイブリッド）の選択肢が提供されていた点

・大規模すぎず、良い規模感でイベントが開催されていた点

・充実したプログラムが提供されていた点

・どのセッションでも質疑応答が活発に行われ、終始温かい雰囲気の中で進行しました。

・今回は発表の機会をいただきありがとうございました。

・準備がスムーズに終わった。

・Workshop スタイルのご発表

・ワークショップは勉強になりました。
・円滑な予定進行だったと感じました。また会場の設備も申し分なく、とても有難く思います。
・やはり勉強になりました。協賛企業の展示も、最近の教材を確認できるのでよかったです。
・英語教育における生成 AI 活用の具体的な方策および示唆について、皆さまの実践例から学ぶことができた点。
・大学の先生方と交流が持てた。
・希望者へのお弁当提供があった点
・昼食や飲み物をご用意いただき、参加者への温かいご配慮が大変ありがたかったです。また、運営も円滑で、充実した時間を過ごすことができました。

［今回の支部大会の改善点］
・今回は私自身が初めて対面で運営に参加したこともありますが、大会前に運営委員の簡単な自己紹介や担当業務の確認、連絡事項を共有する機会があると、当日のトラブル対応や委員間の連携がより円滑になったのではないかと感じました。
・発表中に、ずっとスマホの画面をこちらに向けている方がいました。
・誰がスタッフとして働いているのか、当日の運営委員だけでも名札をつけるか、運営委員のお弁当配布確認シートを準備したほうが良いと思いました。
【異なる階にまたがっての発表・ブース】
・賛助会員のブースが、3 フロアに分かれての実施のため、ブースへの誘導が難しいと感じた。
・賛助会員の展示会場に行ってください、の声がけは、当日の担当委員で分担するなどしてもっとやるべきだと感じた。
・協賛の展示場所と参加者の動線があまり交差しなかったため、展示ブースに立ち寄る方が少なかったです。スタンプラリーや企業からの参加特典を付けるなど、何か工夫が欲しかったです。ご提供できる書籍やクリアファイルなどあります。
【Zoom 関係】
・Zoom 録画やハイブリッドにするのであれば、テックサポートのスタッフを配置いただけたらありがたいです。
・大会要綱には、司会者・参加者・発表者向けの Zoom 運営に関する説明が掲載されていましたが、Zoom 中継や録画に関する認識が十分に共有されていない場面も見受けられました。今回の要綱は、運営向け情報と参加者・発表者向け情報が一元化されている利点があった一方で、必要な情報を探しにくい面もあったかもしれません。大会前日の連絡等で、Zoom リンクやブレイクアウトルームへの入室方法、録画のために資料共有やマイク利用が必要となることなどを改めて案内しておくと、運営がより円滑になった可能性があります。
・当日の研究発表では、司会者は基本的に 1 コマごとのご担当であったと理解していますが、ご負担のない範囲で複数コマを継続して担当いただく形にすると、Zoom 対応や進行がよりスムーズになる可能性があると感じました。
・SIG やワークショップなど司会者が配置されていない枠では、Zoom 中継や録画の実施が十分に共有されておらず、結果として録画ができなかったケースがありました。司会者を配置する、あるいは事前に Zoom 対応や当日の Wi-Fi 接続の必要性についてご案内いただくことで、より円滑な運営につながるのではないかと思います。
・過去には支部総会をオンライン配信し、会員が参加できる形式で実施されたこともあったように記憶しております。今回は支部総会および招待ワークショップの Zoom 配信はありませんでしたが、こうした企画も会員に広く公開される形で実施されると、より参加しやすい大会になるのではないかと感じました。
・Zoom の録画は発表者が行うことで、ご自身でマイクがオンになっているかどうかを確認しながら進められ、音声も問題なく録音されるかと思います。また、録画されたビデオにスライドの切

り替えも正常に反映されると思います。
・1 初めての関東支部大会でしたが、予想より参加者が少なく（それでも中部支部大会よりは多い)、意外でした。課題が、開催日、発表等内容、会場ロケーション、その他の何かは判断できません。少子化の折、どの支部も参加者増は課題なので。2 参加者同士が自由に意見交換や交流する時間や場所が無かったのは、わざわざ会場まで出かけたのに残念でした。オンラインですむことなら、もはや対面開催は必要でしょうか。3 全体的な印象だけで申し訳ありませんが、なぜか少し「古い」と思えました。直感だけです。現役時代に参加した頃のそれと変わらず。なぜそう思えたのか、いまうまく書けずにすみません。
・今回はハイブリッド形式での参加となりましたが、ご案内いただいた教室（505）の接続ケーブルが何か不良のものがありましたようです。
・受付の場所や方法、および受付が終了した後の動線（聞きたい会場のセミナーに向かう）について、集合教室でのアナウンスがあると、当日の動きがなお分かりやすくなると感じました。
・発表のための発表になっているものが散見された点
・イベント終了後には、参加者の皆様で記念写真を撮影し、可能であればウェブサイト等で紹介させていただくことも検討してはいかがでしょうか。参加者の皆様にとって交流の記録となり、良い思い出にもつながるのではないかと存じます。

［基調講演やシンポジウムで取り扱ってほしいテーマ］

・高等教育における AI の利活用
・英語教育への AI の取り入れ方
・AI を用いた学習者の独学方法や学生への指導
・現場の教員に直接役に立つ実践内容等
・授業評価について等
・自律的な学習者の育成
・インクルーシブ教育
・コミュニケーションや表現力をテーマとしたもの
・英検・TOEIC・TOEFL などの資格試験（のスコア）と大学英語教育との関連性、どのように効果的に教育に活かしていくか、など
・研究手法に関するワークショップ
・英語学と英語教育学の接点にかかわる領域
・今、大学生が望んでいる職種とマッチする、英語が必要な職種の方から大学に望む実践的な英語教育とは、という視点で講演など
・特にないのですが、関東支部らしさが欲しいです。全国大会のミニや他支部と似た内容ではなくて。関東支部らしさは何でしょうか。
・新しいトピックというわけではありませんが、JALT の「My Share」のような発表形式を導入していただければと考えております。例えば、発表者が 10 分程度で授業実践やアクティビティ、自分で作成した教材、ICT ツールの活用方法、授業での工夫などを紹介し、その後 5 分程度の質疑応答を行う形式です。短時間の発表ですので、気軽に参加・発表しやすく、多くの会員が平等に実践を共有できる機会になるのではないかと思います。

このような実践共有の場があることで、参加者の関心も高まり、発表者・参加者ともにより積極的に学会活動へ参加していただけるのではないかと期待しております。また、このような形式を取り入れることで、JACET の活動にも新たな魅力が加わるのではないかと考えております。この発表枠の名称につきましては、「英語教育実践共有」や「英語教育実践交流」といった名称をご提案できればと存じます。ご検討いただけますと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

第 1 回支部総会報告

支部事務局幹事
佐竹由帆（青山学院大学）

2026 年 7 月 11 日（土）に早稲田大学で、2026 年度第 1 回支部総会が開催されました。支部総会では、2025 年度事業報告・会計報告、2026 年度事業計画についての説明が行われました。以下に内容を記載いたします。会計報告は省略いたしました。

2025 年度事業報告

I. 大会、セミナー等の開催（1 号事業）

（1）支部大会の開催

2025 年度は全国大会（8 月 27～29 日）が早稲田大学で開催されたため、支部大会は非開催

（2）支部講演会の開催

第 1 回

日時： 2025 年 6 月 21 日（土）
講師： 渡辺敦子先生（文教大学）
場所： オンライン（Zoom）
題目： リフレクションとは？：その変化と発展

第 2 回

日時： 2025 年 10 月 4 日（土）
講師： 藤田恵里子先生（日本大学）
場所： オンライン（Zoom）
題目： “できる気がする”を科学する―自己効力感の見える化―

第 3 回

日時： 2025 年 12 月 13 日（土）
講師： 山内豊先生（創価大学）
場所： オンライン（Zoom）
題目： 生成 AI を活用した英文エッセイと英文スピーチの評価研究の現状と課題

（3）JACET 関東支部企画ワークショップの開催

日時：2025 年 11 月 8 日（土）14：30-15：50
講師：藤原康弘先生（名城大学）、城座沙蘭先生（国際基督教大学）
場所：オンライン（Zoom）
題目：国際英語時代における英語教員養成の再設計：授業実践と全国カリキュラム調査（Reenvisioning English Teacher Education in the Era of Global Englishes: Classroom Practice and a Curriculum Survey）

II.『紀要』「支部ニューズレター」等の出版物の刊行（2 号事業）

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 13 号（英語名：JACET-KANTO Journal）

日時：2026 年 3 月 31 日
発行：XML データ ※J-STAGE および関東支部ホームページに掲載

(2)『関東支部ニューズレター』第 25 号、第 26 号の刊行

日時： 2025 年 9 月 30 日
2026 年 3 月 31 日
※関東支部ホームページに掲載

III. その他（5 号事業）

(1) 支部総会の開催

名称：2025 年度支部総会（第 1・2 回合同）
日程：2025 年 11 月 8 日（土）（関東支部企画と同日に実施）
場所：オンライン
目的：2024 年度の支部の事業報告、会計報告及び 2025 年度の支部の事業計画、2026 年度の支部事業計画、予算案の審議

（2）支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議
日程：2025 年 4 月 12 日、5 月 10 日、6 月 14 日、

9 月 13 日、10 月 11 日、11 月 8 日、12 月 13 日、2026 年 1 月 10 日、3 月 14 日
場所：オンライン
目的：関東支部における支部事業、研究会活動、運営の報告、及び活動報告の立案、審議

2026 年度事業計画
I. 大会、セミナー等の開催（1 号事業）
（1）支部大会の開催
名称：2026 年度関東支部大会
日時：2026 年 7 月 11 日（土）
場所：早稲田大学/ オンライン
規模：約 150 人

（２）支部講演会の開催
名称： 第一回 JACET 関東支部講演会
日時：2026 年 6 月 27 日（土）
講師 : 小張敬之 先生（グローバル Biz 専門職大学教授）
場所：オンライン（Zoom）
題目：英語教育における AI エージェント・3D 学習環境・人間創造性の統合

名称： 第二回 JACET 関東支部講演会
日時：2026 年 10 月 10 日 (土) 16:00-17:20
講師：藏屋伸子 先生（東洋大学法学部助教）
場所：オンライン（Zoom）
題目 : TOEIC 科目で英語を使ったという実感を学生に：学生が生成 AI を使う応用活動

名称： 第三回 JACET 関東支部講演会
日時：12 月 12 日(土) 16:00-17:20
講師：野澤和典 先生（立命館大学名誉教授）
場所：オンライン（Zoom）
題目：AI 時代に求められるプロ英語教員の知識・技能・教育観と教授法

（3）JACET 関東支部企画の開催
名称：JACET 関東支部企画
日程：2026 年 11 月 14 日（土）14:00～15:20
講師：仲 潔 先生（岐阜大学教授）
場所：オンライン
内容：多様性時代における英語教員養成：言語文化観教育のススメ（English Teacher Education in an Era of Diversity: Developing Perspectives on Language and Culture）

II.『紀要』「支部ニューズレター」等の出版物の刊行（2 号事業）
（1）『JACET 関東支部紀要』第 14 号（英語名：JACET-KANTO Journal）
日程： 2027 年 3 月 31 日（水）
形態： XML データ(ウェブ掲載)

(2)『JACET 関東支部ニューズレター』
日程： 2026 年 9 月 30 日（第 27 号）
2027 年 3 月 31 日（第 28 号）
形態： オンライン（JACET 関東支部ホームページに PDF で掲載）

III. その他（5 号事業）
（1） 支部総会の開催
名称：2026 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会
第 1 回
日時： 2026 年 7 月 11 日（土）
形態： 対面/ オンライン
目的： 2025 年度の支部の事業報告、会計報告及び 2026 年度の支部の事業計画

第 2 回
日時： 2026 年 11 月 14 日（土）（関東支部企画と同日に実施）
形態： 未定
目的： 2027 年度の支部事業計画、予算案及び人事案の審議

(2) 支部役員会の開催

①第 1 回支部運営会議

日時：2026 年 4 月 11 日（土）10:00～11:00

形態：オンライン会議

議題：2026 年度支部大会について

②第 2 回支部運営会議

日時：2026 年 5 月 9 日（土）10:00～11:00

形態：オンライン会議

議題：2026 年度支部大会について

③第 3 回支部運営会議

日時：2026 年 6 月 13 日（土）10:00～11:00

形態：オンライン会議

議題：2026 年度支部大会について

④第 4 回支部運営会議

日時：2026 年 9 月 12 日（土）10:00～11:30

形態：オンライン会議

議題：2027 年度関東支部大会・支部長選出、紀要・ニューズレター、11 月関東支部企画、社員選挙について

⑤今後の予定

第 5 回　10 月 10 日（土）10:00～11:00

第 6 回　11 月 14 日（土）10:00～11:00

第 7 回　12 月 12 日（土）10:00～11:00

第 8 回　2027 年 1 月 9 日（土）10:00～11:00

第 9 回　2 月 13 日（土）10:00～11:00

第 10 回 3 月 13 日（土）10:00～11:00

形態：　オンライン

目的：　支部の運営における審議、計画の立案

関東支部運営についてのアンケート結果報告

支部長

鈴木彩子（玉川大学）

来年度の関東支部の活動を検討するにあたり、関東支部会員の皆様から広くご意見を伺うため、9 月 17 日から 24 日にかけてアンケートを実施しました。29 名の方からご回答をいただきました。ご協力いただき、ありがとうございました。以下、アンケート結果の概要をご報告します。

(1) 2027 年度の関東支部大会の開催について

- 開催を希望する：51%
- 特に開催を希望しない：14%
- どちらともいえない：35%

開催を希望する理由として、さまざまな研究分野の会員と意見交換や情報共有を行う機会として支部大会を評価する意見が寄せられました。

一方、開催を特に希望しない回答では、2027 年度に JACET 国際大会が東京都内で開催されることを踏まえ、運営に携わる会員の負担や人的体制を考慮し、無理のない形で開催の有無や頻度を検討してほしいとの意見がありました。

(2-1) 支部大会の開催形態

- HyFlex：45%
- 対面：28%
- オンライン：7%
- 特に希望なし：21%

(2-2) 開催時期

自由記述では、例年通り 7 月の開催を希望する意見が 3 件、7 月は都合がつきにくいとの意見が 2 件ありました。また、授業期間外の夏季・春季休業期間などを希望する意見が 5 件、運営に携わる会員の負担等を考慮して柔軟に設定することを希望する意見が 2 件ありました。

(3) 今後の関東支部大会について

取り上げてほしいテーマや企画については、生成 AI と英語・言語教育に関する希望が多く寄せられました。具体的には、生成 AI を活用したライティングやスピーキングの授業・評価、語彙指導、多言語教育、AI 利用に関する倫理、AI と人間の役割分担などが挙げられました。このほか、認知科学と英語教育、ICT ツールの教育利用などへの関心も示されました。

また、大会のあり方について、特定の研究領域を掘り下げる企画や若手研究者の育成を意識した企画、授業実践や教材、ICT ツールの活用、授業上の工夫などを短時間で共有できる発表形式を希望する意見もありました。

(4) 支部講演会について

講演会についても、生成 AI と言語教育、AI 利用に関する倫理、認知科学、第二言語習得などをテーマとして希望する意見が寄せられました。また、年間の講演会開催回数について検討してもよいのではないかとの意見もありました。

(5) その他、関東支部の運営について

支部活動について、自身の専門分野以外の研究や教育実践に触れる機会として有益であるとの意見が寄せられました。

また、今後の支部運営については、若手会員がより参加しやすい運営、出版・投稿機会に関する情報発信、年間事業計画の早期周知、委員間の役割分担や事前の情報共有などに関する意見がありました。

今回いただいたご意見は、今後の関東支部の活動を検討する際の参考とさせていただきます。アンケートにご協力いただいた皆様に、改めて御礼申し上げます。

JACET 関東支部講演会（第 1 回）報告

支部講演会委員長
青木理香（東洋大学）

JACET 関東支部講演会（第 1 回）報告
日時：2026 年 6 月 27 日（土）16:00〜17:20
講師：小張 敬之 先生（グローバル Biz 専門職大学教授）
場所：オンライン（Zoom）
日本語題目：英語教育における AI エージェント・3D 学習環境・人間創造性の統合

発表概要：

本講演では、RELC、Taiwan & GloCall 2026、JALT CALL で議論された最新の生成 AI 動向を踏まえ、AI 時代における英語教育と異文化理解の新たな可能性について考察する。特に AI エージェント、NotebookLM、マルチモーダル AI、そしてヘッドセット不要の 3D 学習空間を活用した次世代型英語教育の実践を紹介し、AI を「認知的対話パートナー」として位置づける意義を明らかにする。さらに、AI と人間知能の本質的差異を踏まえ、創造性・倫理観・世界観形成といった領域は人間固有の能力であることを強調し、杜維明の「体知」や精神的ヒューマニズムの視点から、AI 時代の教育の哲学的意義について検討する。最後に、最新の AI ソフトウェアの比較を行い、英語教育にどのように応用していくべきかを検討し、人間の創造性と異文化理解を拡張する「共創型英語教育モデル」としての具体的提案を示して講演を締めくくる。

報告：

本講演では、自律的な思考パートナーへと進化する最新の AI 動向を踏まえ、英語教育と人間教育の協働に向けた未来像と具体的な実践内容が示された。

まず、人間と AI の役割分担の基準が提示された。AI には踏み込めない、身体性や直感、倫理観

や精神性など人間固有の領域を教育の核心に据えた上で、知識の習得や文法理解といった基礎学習（低次思考）は AI に委ね、人間は高度な分析や批判的思考、倫理的判断などの高次思考に注力する教育設計「Lighthouse Pedagogy（灯台の教育学）」が提唱された。

次に、この理論を応用した大学での CLIL の実践例が紹介された。最終成果物の完成度だけでなく、AI との対話プロセスや論理の組み立て方を評価するポートフォリオ評価を導入した結果、TOEIC スコアの向上に加え、「英語を学習対象ではなく、自らのツールとして使う」という学生の意識改革に確かな効果があったことが実証された。さらに、バーチャル空間（XR クラウド）を用いた最先端のグループワーク実験も報告された。

まとめとして、これからの社会で必要なのは、指示を待つのではなく自律的に問いを立てて駆動する「モーター型」の人材であり、教育の最終使命は技術の効率化の先にある「人間独自の強み」と「世界観」を育むことにあると強調された。参加者にとって、技術の活用と人間教育の融合について体系的に学ぶ貴重な機会となった。（青木理香・東洋大学）

各委員会からの報告

【支部講演会委員会】

支部講演会委員長 青木理香（東洋大学）

■2026 年度上半期活動報告■

2026 年度上半期は、6 月 27 日（土）に第 1 回支部講演会を行った。講師には小張敬之先生（グローバル Biz 専門職大学教授）をお招きし、「英語教育における AI エージェント・3D 学習環境・人間創造性の統合」というタイトルでご講演いただいた。約 70 名の申し込みがあり、盛会のうちに終了した。

■2026 年度下半期活動計画■

2026 年度下半期の支部講演会の予定は以下の通りである。

◇第 2 回支部講演会：10 月 10 日（土）

題目：『TOEIC 科目で英語を使ったという実感を学生に:学生が生成 AI を使う応用活動』

講師：藏屋伸子先生（東洋大学法学部助教）

◇第 3 回支部講演会：12 月 12 日（土）

題目：『AI 時代に求められるプロ英語教員の知識・技能・教育観と教授法』

講師：野澤和典先生（立命館大学名誉教授）

【支部紀要編集委員会】

支部紀要編集委員長　鈴木健太郎

（北海道教育大学）

紀要編集委員会では、2027 年 3 月発行予定の第 14 号に向けて準備を進めております。原稿募集は 8 月末をもって締め切り、多様なトピックに関するご投稿をいただきました。

今年度からは、小林和歌子先生（日本大学）と Rachel Roberts 先生（神田外語大学）に、新たに編集委員をお引き受けいただきました。

投稿者、査読者、編集委員、支部運営委員、そして会員の皆さまのご協力により、毎年充実した紀要を刊行することができております。今年度も、紀要編集委員会の活動に引き続きご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

事務局だより

支部事務局幹事

佐竹由帆（青山学院大学）

■関東支部講演会及び支部企画のお知らせ■

第 2 回支部講演会の申し込みが始まっております。企画開催予定については以下の通りです。多くの方のご参加をお待ちしております。

◇2026 年度第 2 回関東支部講演会
日時：2026 年 10 月 10 日 (土) 16:00-17:20
場所：オンライン（Zoom）（定員 100 名）
使用言語：日本語
講師：藏屋伸子 先生（東洋大学）
題目：TOEIC 科目で英語を使ったという実感を学生に：学生が生成 AI を使う応用活動
参加費 ：無料
参加方法 ：事前申込制 参加をご希望の方は以下のリンクから事前登録をお願い致します。
https://forms.gle/hsin6Rf3LrbAq1bB6

◇2026 年度 JACET 関東支部企画
日程：2026 年 11 月 14 日（土）14:00～15:20
場所：オンライン
講師：仲 潔 先生（岐阜大学）
題目：多様性時代における英語教員養成：言語文化観教育のススメ（English Teacher Education in an Era of Diversity: Developing Perspectives on Language and Culture）

◇2026 年度第 3 回関東支部講演会
日時：12 月 12 日(土) 16:00-17:20
講師：野澤和典 先生（立命館大学名誉教授）
場所：オンライン（Zoom）
題目：AI 時代に求められるプロ英語教員の知識・技能・教育観と教授法

■住所変更届提出のお願い■
転居やメールアドレス変更など登録情報変更の際には、JACET 本部事務局 （jacet@zb3.so-net.ne.jp）へ変更届を提出してくださいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

***JACET-Kanto Newsletter* 第 27 号**
発行日：2026 年 9 月 30 日
発行者：JACET 関東支部 （支部長 鈴木彩子）
編集者：伊藤泰子、下山幸成、
大野真機、長田恵理、山口高領
発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25
青山学院大学 佐竹由帆 研究室